

生物資源産業学部外部評価委員会

1 日 時 令和4年10月4日(火) 13:30~17:00

2 場 所 徳島大学常三島キャンパス共通講義棟6階大会議室

3 出席者 21名

外部評価委員会委員 4名

生物資源産業学部出席者 9名

事務陪席者 8名

4 会議次第

(1) 全体会議 (13:30~15:45)

- ① 学部長挨拶
- ② 外部評価委員会委員紹介
- ③ 学部関係者紹介
- ④ 外部評価委員会委員長選出
- ⑤ 学部の現状説明
- ⑥ 各委員会からの現況説明
- ⑦ ヒアリング

(2) 総括会議 (15:45~16:30)

(3) 総 評 (16:30~17:00)

5 外部評価結果概要

外部評価委員会委員による評価結果の概要は次のとおり。

総 評

外部評価委員会当日の資料、概要説明及びヒアリング並びに外部評価票の集計結果に基づき、以下のとおり各項目別に外部評価委員会としての総評を取りまとめる。

【1 組織体制】

教員組織については、新学部設置に際し、総合科学部と工学部の改組という手法を取り、元来、徳島大学の持つ特徴、強みを生かした教員配置とすることで、他大学にはない独自の農学系新学部設置への強い思いが感じられる。また、専門分野が農学、工学、理学をはじめ、経済学や経営学を補強するなど多岐にわたっており、学部の基本理念に掲げる「生物資源を活用した新たな産業の創出に貢献できる人材の育成」の実現に期待ができる組織となっている。

教育組織については、学部、大学院ともそれぞれ3つのコースを設置することで、外部から見ても注力点が大変わかりやすく、且つ農学系の幅広い学問体系をカバーできる仕組みとなっている。生産現場である「第一次産業」から「食品・バイオ産業」まで幅広い分野を対象とした講義・実習を展開しており、学生にとって興味、適性、職業選択等に応じたコースの選択肢が充実していることは高く評価できる。

一方で、現在常三島キャンパスにおいて生物資源産業学部の専用棟が無いために、教員及び学生が日々の研究、教育の様々な場面で苦勞を強いられ、運営に支障を来している様子が覗えた。昨今の状況を踏まえるとすぐさま改善することは困難かもしれないが、学生にとっての教育環境整備を第一に考えたとき、将来的には学部専用棟の設置は不可避であり必要な投資であることは間違いない。

また、4つのキャンパスでの実践的教育、大学院博士後期課程の設置やバイオイノベーション研究所の新設等に伴い、教員1名あたりの負担増が懸念されるため、人員配置、業務の洗い出し、他学部との授業共有化などを検証し、大学本部への交渉も含め、組織運営の合理化を一層進めることが望ましい。

今後、石井キャンパスに建築中の「産学連携研究棟」を拠点とした地元自治体や地元企業との共同研究推進、地域課題解決への取り組みがどのように展開されていくのかを期待したい。

【2 入学試験】

新学部設置以来、過去7回の入学試験を実施しているが、「アドミッション・ポリシー」に沿った学生の確保に関し、適宜、検証がなされ改善点について見直しがされている。また、学力の高い学生の確保に努める一方で、貴学部目標の一つである6次産業の担い手の育成に向け、推薦入試及び2年次編入学試験により、一定数について他大学や高等専門学校、専門的職能を修学した多様な受験者から学生を確保されているが、こうした取り組みは、学生、高校、大学、さらには地域産業の担い手育成に期待をする産業界にとっても有益であると考え。多様な入試制度導入ゆえの入学後の学生支援のあり方についても、「入学試験委員会」において、問題点、課題化、対応策がしっかりと検討されている。なお、令和4年度入試から総合問題を化学に変更した点は、受験する高校生に

とって分かりやすいだけでなく、採点する側にとっても的確に高校生の基礎学力を判断でき、化学の基礎能力を有した学生を求めるメッセージを発信できる点で大変有益な改善である、という評価が委員全員の意見として一致した。

アドミッション・ポリシーに沿った入学者が確保できていれば問題ないが、一部に低得点の合格者が出てくる（特に大学院入試の英語の得点が気になるという意見あり）という現状に鑑み、一定の競争原理を確保した上で定員確保が図られるよう、学内はもとより県外・海外の大学からの受験者増について積極的に対策を講じてもらいたい。また、入学後の学生の就学状況、卒業・修了状況を確認し、高等学校との情報交換を行うなど、各入学試験で入学した学生のその後の傾向を分析することも望まれる。なお、大学院入試における受験者増に向けた取り組みとしては、貴学部独自の研究分野の開拓とその一層の充実や、例えば「生物資源」をテーマに学部名にもある「産業」界との強い結びつきを特徴とした研究・教育手法を取り入れるなど、「徳島大学ならではの」の独自性を前面に出し、他大学や産業界をはじめ社会全体が認知する「徳島大学ブランド」の構築に取り組まれない。

【3 教育体制】

生物資源産業学部設置後、一定時点においてカリキュラムの見直しに着手され、旧カリキュラムの問題点を洗い出し、それを少しでも改善できる方向性を打ち出している。カリキュラムの改定にあたっては、学部及び大学院で策定された「カリキュラム・ポリシー」をはじめ、コース毎のポリシーに定めた基本方針からぶれることなく安定性が確保されている点が高く評価できる。専門知識の修得が可能な教育体系に取り組む一方、アントレプレナーシップの醸成を念頭に、卒業後すぐに社会に貢献できる人材の育成に向けた様々な創意工夫が凝らされている。また、学部の特色である4つのキャンパス（フィールド）の強みを活かした基礎教育及び専門教育を実施しており、特に現場での実践力を養う教育（起業体験実習、商品開発プロジェクト演習、インターンシップ、生物生産フィールド実習、経営経済、知的財産等）により学生に幅広い経験と知識を提供できる教育体制となっていることが評価できる。さらに、大学院創成科学研究科生物資源学専攻の教育プログラムでは、自らの研究分野を多角的な視点で見る能力を養い、且つ専門性を深化させる「教育クラスター」制度が導入され、分野的横断型教育を推進する理想的なしくみが構築されている。今後の成果に期待したい。

敢えて課題を挙げるとすれば、学生の指向性、特性を行かすことを意識しすぎると学部の理念を達成するために必要な科目の設定を見失う可能性があるため、例えば各コースにおいて履修モデルのようなものを作成し、将来の進路に必要な知識獲得のためにはどのような科目履修が重要かを提示するとか、大学院や企業での研究に役立つスキル（クリティカルシンキングやディベートなど）が身に付く科目を紹介する、卒業生の進路先で新入生が魅力を感じる事例があればそれを積極的に紹介するなど、さらなる工夫を検討いただきたい。

【4 委員会活動】

コロナ禍という前例のない状況でありながら、総じてどの委員会においても教職員が創意工夫、改善を心がけて取り組むことができています。特筆すべき点として、教務委員

会がカリキュラムの改革を実施し教育の充実化を図ったこと、学生委員会におけるクラス担任制による相談体制の充実、教育プログラム評価委員会が教育対象者である学部学生委員、大学院学生委員を含めた構成員で組織されており、大学側・学生側の両面での評価が行われていること、入学試験委員会での入試制度検証が挙げられる。少ない教職員でこれだけ様々な委員会を機能させ、成果をあげている点は素晴らしい。反面、教員は学内外の各種委員会による評価や授業評価アンケート、教員アンケートなど、常に評価にさらされている状況にあり、精神的負担も相当なものと推察する。

今後より良くしていくために、大学院学生から学部のシステム（教育システムばかりでなく、担任制度や表彰制度も含め）について意見を聴取することが有意義だと思われる。また、若手教員を中心に、組織の課題や将来ビジョンについての忌憚なき意見交換をできる場が充実化することを期待したい。

【5 研究関係】

研究業績（論文数等）について、過去4年間の実績比較で見ると多くの指標で減少傾向となっているが、コロナ禍による影響や教員の入れ替わり・異動、新大学院設置に向けた準備対応など、減少した主たる要因分析及び考察がしっかりとできている。クラウドファンディングによる研究資金の獲得や、大学の研究成果を「産業化」する仕組みづくりなど、アカデミアの使命である先端的且つ独自性の高い研究を推進している点が評価に値する。教育、組織整備、運営、地域連携などに割り当てられる時間が多く、研究に使える時間が少ない中で成果を求められるという厳しい状況だが、石井地区に「産学連携研究棟」が新築される予定であり、本施設を拠点とした新たな産学官連携の研究活動が活発化することを期待する。また、地域連携を主軸としつつも、外国人研究者の受け入れや教員及び学生の海外派遣を増やすなど、グローバル且つ多面的に研究を展開できることが望ましい。

【6 地域貢献】

徳島県はじめ地元企業や団体等からの強い要望を受けて設置された学部だけあって、地域との密接な連携は特に高く評価できる。特に農林水産分野において「アグリ」「フォレスト」「マリン」の各サイエンスゾーンを形成し、徳島県下の公設研究機関や民間企業と協力して生まれた研究成果が実用化されるなど、地域に還元される仕組みとなっている点は地域活力の向上に大きく貢献していると言える。また、コロナ禍にあってもオンライン開催を取り入れて地域の中学生・高校生に向けた連携事業を行うなど、精力的な活動が実施されていた。このような素晴らしい実績がどの程度研究業績と結びついているかなどを分析し、うまく表現するような広報 PR 手段を検討し、学部としての魅力を外部に向けてさらに発信できると尚良い。

【7 各キャンパスの活動】

農学系学部にとって、魅力的なフィールド現場を形成することは、学生の教育はもちろん、地域貢献においても大変重要である。生物資源産業学部では、各キャンパスのフィールドワークを活用した実践的な教育を実施し、教員の研究活動の成果を製品化につなげるなど、アクティブに活動できている。令和2年に設立されたバイオイノベーション

ン研究所を中心とする産官学連携の取り組み加速化、水圏教育研究センターにおける徳島県と連携した水産振興に係る研究、新野キャンパスと阿南光高等学校との高大連携事業など、これからの活動に大いに期待できる。一方で、それらの活動は教員の多大な労力や時間により支えられており、イノベーション拠点化により業務はさらに増大したと推察される。運営を支える教員や職員の一層の充実化を図るとともに、場所的分散のデメリットが生じないようあらゆる手段を活用した教育・研究環境の整備に努められたい。なお、フィールドを使った商品化をする際、経済系の教員もまじえて、食品産業としての評価を加えれば、生物資源産業学部としての理念を大学執行部や学外に広くアピールできると思われる。

【8 全般的な評価】

○特に評価できる点

- ・農学系学部でありながら、他大学には無い特徴を持った学部として独自性を追求した研究及び教育がなされている。
- ・養成する人材像をもとに、カリキュラムに工夫が凝らされている。
- ・少ないリソースで懸命に創意工夫し、より良いものを目指して努力している。
- ・地域との結びつきを大切にし、地域ニーズに応える大学として、4つのキャンパスを円滑に運営し、教育研究実績順調に上げている。
- ・石井地区に産学連携研究棟を整備予定など、オープンイノベーションに向けた意欲的な活動が実践されている。
- ・教育プログラム評価委員会、自己点検・評価委員会、各種アンケートにより、適時にステークホルダーの意向を聴取し、自己評価・改善するしくみが構築されている。

●課題・改善を要する点

- ・教職員、学生、学外に諸活動がうまく伝わるような広報を検討いただきたい。
- ・新学部が目指す教育、研究ができる十分な教員数を確保されたい。
- ・学部専用棟の整備については、優先順位の高い改善点である。効率的な運営や学部としての一体感、将来構想を踏まえると、議論を待たないレベルだと感じた。
- ・他学部授業の活用などを工夫し、研究に充てるエフォート率を増やすことが望まれる。

□今後に向けた提案・期待したい点

- ・スクラップアンドビルドの精神で、不要と思われるものを削ることも大切である。
- ・教員数が特に手薄なキャンパスにはさらなる人員補充を検討の上、学部の地の利を活かした特色ある研究がさらに開花することを期待する。
- ・さらなるグローバル化に向けた施策、効率的な大学経営に対するアカデミアならではの柔軟な発想に期待する。